

家族との関係改善 成果着実に

研究者と月1回意見交換

サイエンスカフェ1年

市民と研究者が月一回集まり、自閉症について学術的な視点も交えながら話し合う意見交換会「自閉症サイエンスカフェ」が金沢市で始まってから、六月で一年を迎える。会合では、障害の特徴に関する素朴な疑問や、薬物治療の可能性などが話題に上る。参加者の中には、自閉症への理解が深まり、家族関係が改善された人もいるなど、成果は着実に表れている。今後は地域や職場単位へと場を広げていく予定だ。(奥野斐)

「先生、自閉症は治療、家族との接し方を、近年、増加傾向があるのでしょか」
 「現状では完治しない。でも、環境によって改善されるし、薬物治療の話も挙がっている」
 「先生、自閉症は知的障害、家族との接し方を、近年、増加傾向があるのでしょか」
 「現状では完治しない。でも、環境によって改善されるし、薬物治療の話も挙がっている」

自閉症 理解深まる



自閉症への接し方や薬物治療の可能性などを話し合う「自閉症サイエンスカフェ」(金沢市広坂)

自閉症 対人関係がうまく持てないことや言語発達の遅れ、活動や興味の範囲が極端に狭く、特定の行動にこだわることなどの特徴で診断される。大井教授によると、アスペルガー症候群など知的障害のない自閉症者は約100人に1人に上り、自閉症者全体の7割ほどを占める。
自閉症サイエンスカフェ 毎月22日にしなのき迎賓館で開催。時間帯は毎回変わる。次回は6月22日午前10時～正午。参加無料、申し込み不要。(金沢大連合大学院事務) 電話 076(26)52458

誰でも参加でき、研 究者や職場の対応策が魅力の会。この場でもに障害と分からず、障害の特徴を知り、引周知から「変わったき」もりの息子の関人「空気を読めない」と思われている場もある。その五十代の女性も「十年以上理解できなかった息子の言動がふに落ちた」と振り返る。「一人との距離感がつかめない」「特定の音に敏感」が指摘され、地域や雇

利かない」…。女性 する企業などの理解もは、こうした特徴が二求められている。十代の長男に当てるは、会を企画した金沢大の母の自分にも他人行儀。居間の蛍光灯を消したり、テレビの音を嫌って音量を小さくしたりしていた。「引きこもりの背景に障害があることが分かったら、具体的な自閉症者が楽になった」
 ◇ 自閉症は特徴がさまざま、一見では分からない。女性も自閉症は多かったのか。そんな疑問をある研究者にぶつけると、「時代が障害者にした面もある」と意外な答えが返ってきた。
 現代は「コミュニケーション偏重社会」が求められる。マイペースだったり、人と興味が違っていたりすると、浮く存在に。健常者と障害者の境界が限りなく薄れてきている。彼らの中には、特定の分野で秀でている人も。個性と捉える社会にできないもの